

かぐらおが

第 38 号

昭和59年1月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 解剖学第一講座 石川 一志)

ユーカラ
 優佳良織工芸館

内 容

副学長に就任して……………	石井 兼央…	2
研究・専門教育・教養……………	星野 了介…	3
海外だより ジョンス・ホプキンス大学に留学して…	藤枝 俊儀…	4
海外だより ニューヨークの医師とスポーツ……………	石川 睦男…	5
新任教官紹介……………		6
泌尿器科学八竹直教授を迎えて…	黒田 一秀…	6
就任にあたって……………	八竹 直…	6
紹介……………	丸子 基夫…	7

“Friendly Giant”……………	J・A・Sunley…	7
研究室紹介……………	池畑 正宏…	7
昭和58年度通学方法・居住状況調査結果一覧……………		8
解剖体慰霊式……………		9
体育大会……………		9
新入生研修(第2回目)……………		9
課外活動短信……………		10
窓 外……………	久保 良彦…	10



副学長に就任して

副学長 石井 兼 央

教育等の副学長に就任してから約三ヶ月になりなれない仕事が多く毎日てんでこ舞いですが、就任の辞を書くようにとのことですのでこの機会に感想の一端やらお願いなど述べさせていただきます。

本学の沿革をふりかえってみますと、昭和48年9月に本学が設置され、同年11月5日に第1回入学式が挙行されました。附属病院が昭和51年5月設置、同年11月に開院されております。創設準備に迫られた本学の“神代時代”もここで一区限がついて、昭和54年3月第1回の卒業生を送りだしております。同年4月には大学院医学研究科が設置されました。御承知のように本年6月には開学10周年記念行事が盛大に行なわれております。早いもので本学が誕生してから満10才になるわけです。この間に5回の卒業式があり、現在446名の卒業生諸君が医師、医学研究者として社会で活動しておられます。昭和55年度から学生の入学定員が20名増となり、それに伴って教育施設の改善、中央実験施設と病院施設の拡充、教官の若干増がありました。本学は誕生後10年の若い大学ではありますが、既に“新設医科大学”ではなくなりましたし、世間では一人前の医科大学としてみていると思います。

国の高度成長経済政策に伴った無医県一医大もほぼ終了に近づく昨今は一転して医師過剰時代の到来が近いと話題になるようになりましたし、国の財政も国家予算の抑制という時代に入りつつあります。最近の情勢によると教育行政、医療行政もこの移り変りの例外とはなりえない印象があります。本学の10年の歩みは時代の流れの10年でありました。

さてしかし、どのような時代にあっても大学の使命に変わりはない筈であって本学の使命の医学教育・研究・診療を高く掲げて前進しなければならぬと考えますし、本学の伝統が形成されるのはむしろこれからの10年であろうと思います。教官の先生方、学生諸君の御協力、御努力をお願い申し上げたいと存じます。近年の医学および関連領域の進歩において本学の教官数が古い歴史の医学部に比して決して十分であるとはいえませんが、しかし本学の教官諸先生が多忙な研究や診療活動のなかで教育活動においても全力投球をされておられますし、また教育環境の整備などについても教官の先生方の御努力によって鋭意、できるかぎり行なわれております。このような全学的な教育への姿勢は本学開設以来の姿勢でありましたし、本学の特色であると考えております。初

代学長山田名誉教授、初代病院長であられた黒田学長、教育等担当の初代副学長下田教授、二代目副学長小野寺教授の御努力に深く敬意を表しております。

こうした本学の教育への熱意と努力は学生諸君にもよく分って頂いているとは思いますが、この拙文を読む機会がありました学生諸君にここであらためてお願いいたします。諸君は医学への道を選んで本学へ入学されておられるのですが、医学を志された初心、いろいろな動機があったでしょうが、その初心に時々立ちかえってほしいと思うのです。第2点、学習についてですが私は次のように考えております。医師、医学研究者という専門的職業への道での学習は諸君が経てきた教科書中心の教育内容とはかなり異なるということです。医科大学での講義では一般教育、専門教育を問わず現在の学問、医学と関連分野でのトップレベルの理論、知識もあるし、ブラクチカルな方法論、技術論もあるでしょうし、多岐広範囲にわたります。一步一步と理解を積み重ねなければなりません。理解するためには学習の過程で生じた疑問をそのままにせず自から疑問を解決する努力をしなければ体系的にはならないでしょう。疑問があれば講義の折に教官の先生にどンドン質問するのもよいでしょうし、時間を割いて図書館を利用することも大いに結構と思います。ともかく自分で努力し理解を積み重ねることが医学教育ではもっとも大切なことだろうと思います。

暗記だけで憶えるには学ぶ量が大きすぎる内容でしょう。毎年の医師国家試験合格率をみても本学卒業生の素質は十分あると思っております。もっとも医師国家試験合格率だけで判断するのは軽率ですが、本学の学生諸君がやる気があれば特別に難かしい学習課程ではないと考えております。

本学の研究活動も開学10年を経て更に一段と活発化しつつあると思われまふ。国の財政事情は大学の研究活動にも好ましからざる情勢ではありますが、機器の整備、運用の調整も私に課せられた役目の一つのようにあります。

教官各位の御協力を得て適正、円満な調整に心がけていきたいと思っております。



研究・専門教育・教養

星野了介

「大学とは何か」とは、よく聞かれる言葉である。「大学は真理の探究の場である」と長い間言われてきた。或は「大学は専門的職業を志す人の教育をする機関である」とも云われる。旧制の高等学校、大学の卒業生の回想には、「役に立たないと思っていたことが、実は意外に役に立った」というのが多い。どうも大学生活の間には、はっきり意識されていたわけではないが、まだ何かがあったようである。学生の年齢は20才前後である。子は親を見て育つという。学生は、我を忘れて研究にうちこんでいる先生を見て育ってきたわけである。大学における研究と教育は不可分の関係にある。大学生活の間に培われるべき何かを、一般教育或は教養と名前をつけて、制度として大学に組みこんだのが新制大学である。ただ形を整えるのに急で、中味についての検討、計画、実行は十分でないまま現在にいたっているのは残念である。

「教養のある人」というと、何か文学的知識人を思いうかべるのであるが、ここにとりあげられた教養は、自然科学的な教養を含めたものとして考えられている。今日の社会に於て、自ら深く考え、正しい判断をし、実行するためには、その専門を問わず科学的な教養は不可欠になってきているからである。ここで旭川医科大学の一般教育課程を見てみよう。旭川医大は新しい大学である。

専門教育の態勢が出来上っており、或る日突然一般教育課程がつけ加わったのではない。最初から研究、専門教育、教養を総合的に検討し、均整のとれた医学教育のプログラムをつくりあげ、そして一般教育の授業から始まったのである。そこには綿密な計画があり、しかも着々と実行されていったのが大きな特色である。入学試験に医学部の教授がすべて関与するといったことは、既設の医学部では考えられなかったことであろう。この間の事情については、小野寺教授の書かれた昭和50年12月13日付の「医科大学における一般教育のあり方」という資料に実に明快に述べられている。このようにして10年間の成果は高い評価を得るにいたったわけである。

大学は毎年新入生を迎える。今年の新入生は昨年の新入生と同じではない。最近「毎日学校にゆくのは何のためかと疑問を持つようになった」と学生から聞くことが時々ある。「医師になるためだ」というのは、その学生にとっては答えのほんの一部にしかなり得ない。新入生はどのような道筋を通して大学にきたかを考えて見る必要があるようである。大半の学生は、小学校から10年近くも受験を中心とした勉学を続けてきている。すべての

テストは数量化され、加算され、平均値として比較される。1点多いか、少ないかが学生にとって最大の関心事となる。1点のためには、さまざまな疑問をいだし、自分で納得する迄考えるというようなことは一時お預けとせざるをえない。もっと悪いのは、せっかくのよい能力が萎縮してしまうのではないかということである。もともと大学にはいることは手段にすぎないものであるのにそれが唯一の目的になってくる。共通第1次学力試験が行なわれてから、この傾向は予想以上にひどくなっているようである。こうして大学にはいつてくる。はいつた途端に、唯一の目標が消え去る。精神的な虚脱状態に落ち入るのも当然と思われる。学校ではそんなことにはおかまいなしにどんどん講義が進められ、またもや個々の知識の習得に追いまわされる。そのうちに前述のような学生の声がきこえてくることになる。このようにみえてみると、我々教師は満足のいく答えをする用意があるのだろうかと思ってしまう。必要なのは、新しい目標の設定、計画、実行、そしてフィードバックの方法などについて学生と教師の問題として真剣にとり組んでゆくことではなからうか。実は、このことは少くとも第一期生については行なわれたのである。余程のことがない限り、欠席する学生は見あたらなかった。ただ、小学、中学、高校と10年にわたって抑圧されていたものをとり出し、良い方向に向け、育てようというのであるから時間がかかることは覚悟しなければならない。しかし、これが一般教育ではなからうかと思う。大学も10年たつと、やはり10年分の重みの為多少動きがよくなったようにも思える。だからと云って、単に惰性で動いていけばよいというものでもないことも明らかであろう。

(物理学 教授)



海外だより

ジョンズ・ホプキンス大学に留学して

藤 枝 俊 儀

昭和58年1月より、アメリカ東海岸メリーランド州ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学医学部で「神経伝達物質と薬剤の相互作用に関する基礎的研究」に従事してきました。帰国して2週間、やっと左ハンドルから右ハンドルへの勘を取り戻してきたところですが、ジョンズ・ホプキンスの研究室やボルチモアの様子などを簡単に紹介しようと思います。

私の行っていたジョンズ・ホプキンス大学は、医学部の他工学部、国際学部などを有する総合大学で、学生数は約9,000人といわれています。特に医学部は、アメリカではハーバード大学、スタンフォード大学と並ぶ伝統のある学部で、ボルチモアの富裕商人Johns Hopkinsの資産を礎に1889年に創立されたHospitalをはじめとして、School of Medicine, School of Hygiene and Public Healthの3部門からなっており、JHMI (Johns Hopkins Medical Institutions)と称されています。Hospitalの規模は、ベッド数1,078床、医師1,850名、看護婦1,400名、その他の職員3,650名で、これに種々の身体障害や精神障害を有する小児の治療と研究にあっている隣接のJohn F. Kennedy Instituteを加えたダウンタウンの一郭は、さながら一大医学センターの観を呈しています。

私が所属していたのは、精神医学部門Joseph T. Coyle教授の研究室で、ここでは総勢12名のスタッフが神経伝達物質の合成・貯蔵・代謝に関する生化学的研究や精神薬理学の分野に関する研究に従事していました。彼らは、一般の典型的なアメリカ人とは異なる“働くアメリカ人”の集団で、「トップレベルをいくオリジナルな研究」を合言葉に最新のコンピューターや各種分析機器を駆使し、日夜エネルギーに仕事に取り組んでおり、さながら“生物学的精神医学研究の最前線”といった感がありました。Coyle教授の研究室は、NIMHからの研究費や各種財団からの資金を得て比較的恵まれている方なのですが、それでも1,500ドル/月を越す実験動物の飼育管理費に悲鳴をあげ、文献はコピーするより直接著者に請求すべしといった節約令が出されるなど、研究費の少ない悩みは世界各国共通のようです。

ジョンズ・ホプキンス大学医学部の精神医学部門は、もともと力動精神医学を唱えたAdolf Meyerにより基礎が築かれたところですが、その同じ教室で解剖学、生理学、生化学、遺伝生物学など関連諸分野との活発な交流を通じて明らかにされつつある生物学的精神医学研究の成果は、精神疾患の理解に大きな発展をもたらすものといえましょう。

ところで、チェサピーク湾奥のパタプスコ川の河口近くに位置しているボルチモアは、その恵まれた地理的条

件を背景に造船、食品、印刷、鉄鋼、機械などの産業が早くから発達し、19世紀初頭にはここを起点にアメリカ最初の鉄道が開通するなど大いに繁栄したといわれています。しかしながらその後の鉄道事業の斜陽化と近年のアメリカの経済情勢の悪化を反映して、街の中は90万人、全米9位の人口を擁する大都市としての活力はみられず、中心部のビル街も“疲れの見える巨人”を象徴するかのように関散としており、不気味でさえあります。これは日本の新聞、TVなどで報道されているように、アメリカの都市部における治安の悪化が一因で、ボルチモアもその例外ではありませんでした。病院と渡り廊下でつながれている駐車ビルへの出入りも、夜間ともなると女性はおろか男性でも一人では危険とされ、屈強なsecurity guardにエスコートを依頼することになります。JHMIだけでも226名ものsecurity guardがいて絶えず施設内を巡回しており、また各入口では職員といえども写真入りのIDカードを提示しなければ通行を咎められるという有様で、この国の病根を垣間見たように思います。このような治安の悪化を嫌ってか白人資産家階級は皆続々と郊外へ転居しており、私も命あつての物種と家賃の高いのは覚悟して市と郊外のちょうど境界線のあたりにアパートを求めましたが、この時ほど“安全や自衛のためにはお金がかかる”とどこかで聞いたような言葉を身をもって体験したことはなかったように思います。幸い周囲に住んでいた人々は親日的なユダヤ系のアメリカ人が多く、これらの人々と家族ぐるみで交際する機会に恵まれました。

一口にユダヤ系といってもアメリカの開拓時代から住みついている人々、19世紀から第1次大戦前後にやって来たロシア系の人々、第2次大戦前後にやって来た東ヨーロッパ系、ドイツ系の人々などさまざまですが、皆勤勉で努力家が多く、ジョンズ・ホプキンスにも大勢のユダヤ系の医師が働いていました。人種のるつぼといわれている多民族社会にあってユダヤ系の人々の占める割合は2.4%にすぎませんが、少数派であるだけに彼ら同士の絆は強く、通常の祝日の他に独自の暦日にしたい9月中旬に新年を祝い、故事に則り断食をし、水中に棲みながら鱈や鱈のないエビ、カニを忌み嫌って食べないなどの慣習を見聞きするにつけ、今まで異質の文化に触れる機会の少なかった私には新鮮な驚きでした。

治安の悪化、失業率の増大、物価高など当のアメリカ人自身にとっても住みにくくなってきているアメリカでの生活は不安と困惑の連続でしたが、とにもかくにも平和で安全な日本に“生きて戻れて”ほっとしている次第です。

(精神神経科 講師)

海外だより

ニューヨークの医師とスポーツ

石川 睦 男

小雨のバラつく肌寒い10月23日、日曜日の朝、ニューヨークシティマラソンがスタートした。約一万七千人の人々がスタッテンアイランドのベラザノブリッジから一斉にスタートする光景はテレビで見ているだけでも壮観なものである。我々はマンハッタンにある友人のアパートに泊りこみ、このN.Y.の大イベントを見るべく待機していた。

先頭集団がブルックリンからクイーンズを通りマンハッタンの一番街に来るのを見計らってアパートを出た。折悪しく雨足は次第に強くなり、皮ジャケットを着ている寒いにもかかわらず、お祭り好きのニューヨーカーがぞくぞく集まって来る。やがて大きな歓声と共に先頭集団が現われ、次々にランナーが走りぬけて行く。間もなくテレビのモニター車と共に女性のトップランナーが来ると、男性の時に比べはるかに大きな拍手と歓声が送られる。しかし私にとってもっと印象的だったのはこれらの華やかな先頭集団に遅れること二時間以上で延々と走って来るランナーと、その人々に送られる限りない声援であった。老夫婦、若いカップル、ぬれぬずみのキャリアウーマン、片足の男性、車椅子の人、全身紫色の衣装でかためた男、途中で待機していた妻とキスを交わしてから再び走り出す人、タイム制限のないこの大会には実に多くの普通の人が参加している。その人々に声を限りに「Good face」「You are great」と叫ぶ縁道の人。

N.Y.マラソンはスポーツを愛するN.Y.市民の協力と援助で成立していることがひしひしと伝わってくる。以前留学していた時の知人でロックフェラー大学の日系二世の生化学者は50才を過ぎているが、毎年参加し、完走している。

マラソンに限らず、私の身近にも多くのスポーツ愛好家が居る。私の現在のボスであるDr. Fuchsは世界で初めて羊水セン刺をしたことで有名だがコーネル大学の産婦人科のChairmanを長く務めた後、Emeritus Professorとして、60を過ぎた今も活躍中である。今回の渡米に当たり、家が決まらずに、一時彼のパークアベニューのマンションに居候した時の事である。やはり科学者である夫人同伴で一週間程スペインでの講演旅行から帰国したのはもう夕刻であった。家に着いてから一時間程寝室で休んだあと、簡単な夕食をとり、山の様な一週間分の手紙の整理をし、10時過ぎ、友人との約束でテニスに出かけると云う。しばらくしていないのでボールにスピードがないかもしれない等と笑いながら、夫人と出かけ帰宅したのは深夜であった。スペインとの時差は7時間だという。長年の経験による最善の時差ばけ解消法かと思ってもみるが、彼の年令と長時間の旅程を考え合わせると

翌朝7時には、シャワーをあびて平常と変わらぬ生活に戻ったにはいささか驚かされた。多くの医師が自己の健康管理のためにスポーツに努めるのは、単にそればかりでなく、アメリカという競争社会で勝ち抜くための知恵なのかもしれない。

しかし一方で、産婦人科の医師の一人がジョギング中転んで手を折ったため暫く臨床ができなくなった等という事故も聞いた。またハンガリー出身のスタッフの顔が見えないと思ったら、彼はジョギング中、心臓の具合が悪くなり、目下精検のため入院中であつたという笑えない話もある。彼は常々私に「Don't work so hard」等と言っていたのは皮肉の限りである。

私は自宅のあるロングアイランドのポートワシントンから汽車に乗り、地下鉄を2回乗り換えた後20分程歩いてコーネル大学の研究室に通っている。地下鉄の構内も結構歩きごたえがあるし、通勤以外でも、マンハッタンの中では乗り物より歩くことが多い。日本に居る時に比べると大変な運動量である。又家に居ても週末はテニス、夏の間は水泳も加わるので、ずい分健康的な暮らしをしていることになる。心なしか腹のゼイ肉も落ちた様に思われる。

幸い旭川医大はスポーツの環境には恵まれているので帰国後もできるだけ機会を見つけてスポーツに親しみ、歩く習慣も続け、体力向上を企りたいものだと考えている。

(産婦人科学講座 講師)



新任教官紹介

昭和58年8月16日付けで、泌尿器科学講座に八竹教授、昭和58年10月1日付けで、英語の外国人教師としてJ. A. サンレイ教官が就任されました。両教官は既に講座・診療科充実を図られ又、講義を受け持たれています。本誌では新任教官から御挨拶をいただくとともに、親しい教官から御紹介いただくこととしました。新任教官の教育研究方針を理解する一助としてください。

(学生課)

泌尿器科学八竹直教授を迎えて

学長 黒田 一秀

泌尿器科学講座は、内科学第一、外科学第一と共に、昭和48年開学時開設臨床3講座として、本学の先発講座の一つである。泌尿器科学担当の私が病院長予定者であったからである。従って今年、暦の上では開講10周年となるのであるが、実際に泌尿器科学の講義が始ったのは、第1期生の4学年後期からなので51年10月でなかったかと思う。一昨昨年泌尿器科教授併任を解かれた後もなお、学会開催等の都合もあって、私が教室の仕事をあずかっていた。その意味で関係各位、ことに教室員の諸君にはいろいろ御迷惑をおかけしていた。この度8月16日付けで八竹直教授をお迎えできたことは、大学としても個人的にも喜びにたえないのである。

八竹教授は大阪の生れ、厳父も医師でいらっしゃる。大阪大学を昭和39年に卒業、以前は楠教授、現在は園田教授の阪大泌尿器科教室に入り、大学院を経て、新設近畿大学医学部で栗田教授主宰の泌尿器科学教室創設に際して助教授に就任、今日に至った方である。尿路結石、腎移植、排尿機構等々に多くの業績を挙げておられる。その間西独アーヘン大学で2年間の在外研究もされた。

御家族については、摂子夫人もお医者様で、実は阪大医学部同期生、小児科専攻と承っている。高校生と小学生の2人の男の子をお持ちである。近大医学部では陣内病院長と共に画かきとして通っておられ、運動はゴルフでもスキーでも何でもたしなまれるというので、来年早々八竹教授就任記念日本泌尿器科学会北海道地方会では、学会翌日歓迎スキー大会を計画しているのである。厳しい研究生活を経験されながらも、家族団楽とスポーツ心を持つ、八竹教授が新しい風をわが大学に吹き入れて下さったことを感謝すると共にこれからの御活躍を期待して御紹介の言葉とします。

就任にあたって

■ 泌尿器科学講座 ■

八竹 直



北海道には暑かった8月16日、黒田一秀学長が主宰されていた泌尿器科学教室の後任として着任しました。私は大阪に生まれ、大阪に育ち、大阪大学医学部を昭和39年に卒業した、まったくの浪速っ

子です。西ドイツに留学していた期間を除けば、大阪以外で生活したことがありません。それがどうした御縁か、この寒いといわれる旭川に奉職することになりました。

大阪のむしむしする暑さに慣れている身にとって寒さはまったく苦手で、これから訪れる旭川の冬の寒さは想像もつかず、毎日空を見上げながら恐れ戦いている有様です。しかし大阪のごみごみした、また人人人の環境に比べ、このすがすがしい北海道の自然のなんとすばらしい事かと感嘆しています。

さて、私は8年前大阪大学から旭川医科大学より一年遅れて新設された近畿大学医学部へ、栗田孝教授のもとで助教授として就任し、新しい教室づくりを手伝わせてもらいました。国立と私立の違いはあれ、旭川医科大学がこの10年に経験された新設期の苦労を同じように味わってきました。人不足、物不足の上に、伝統が無いことによる不利をいやというほど経験しましたが、逆にまったく新しい経験が出来たことは貴重なことでもありました。

旭川医科大学泌尿器科学教室もすでに10年の歴史とかなりのスタッフを擁しておられます。教室の基礎づくりを終えられて発展期に入った時期に呼んで載いたように思えます。近代泌尿器科学そのものが若い学問ではありますが、当教室にもスタッフの若々しい力が満ち溢れていますので楽しみです。就任して3ヶ月そこそこでは、まだ大きな抱負を述べるところまではまいりませんが、この教室員全体の若い力を結集して、診療、研究、教育の各面に大いに飛躍したいものだと考えておりますので、よろしく御願いたします。

(泌尿器科学講座 教授)

紹介

丸子 基夫

新任外国人教師 John Andrew Sunley 氏、31-3-1955 生れ。理科高等中学を卒業後 1973-1976 までケンブリジ大学 Pembroke 分校で主に社会科学を専攻。1980 年マスター・オブ・アーツ (Leeds Uni)。

職歴：高卒後半年間アメリカの木材工場勤務、院生のときオランダで英語教師、1981-82 ロンドンにて生物電磁気学を研究、1982-83 サントリー KK にて英語教師。

趣味：スキー、テニス、テナーサックス、カメラ。

(ドイツ語 教授)

"Friendly Giant"

■ 英語 ■

J. A. Sunley



I hope that everyone in Asahikawa Medical College is becoming accustomed to my admittedly extreme height and typical Anglo-Saxon appearance. Please remember that

after meeting me nobody you meet will seem so tall and foreign again. An old man that I used to talk to in Osaka warned me that Asahikawa was "as cold as Siberia" He made me quite worried that I might freeze up here on Japan's New Frontier. After two months here I am completely reassured. However rigorous the winter in Asahikawa becomes the warm friendliness and helpfulness of everyone I have met will more than make up for it. As a consequence I am enjoying myself very much and am looking forward to my stay here. In particular I hope to enjoy the breathtaking natural scenery, the skiing and the hot springs.

Its still rather early to articulate what I hope to achieve here although I do aim to learn spoken Japanese and generally to appreciate and enjoy modern life in Japan. Beyond that I may pursue an anthropological interest in Japanese society. As far as teaching, English is concerned my goal is to improve the speaking and listening skills of my students through hard work, variety and enjoyment. Thank you to everyone for a very pleasant welcome.

(外国人教師)

研究室紹介

■ 歯科口腔外科 ■

池畑 正宏

歯科口腔外科は、大学附属病院の診療科として、昭和51年11月に開設された。当時は北大歯学部口腔外科より数名の助手が派遣され診療が行われていた。昭和52年11月、弘前大学より北進一教授が赴任し、その後、講師、助手、医員も増え、現在医局員は7名、他、島崎、鈴木文部技官(歯科技工師)、小林文部事務官、秘書の渋谷君と小世帯ながらもまとまった医局である。昭和57年1月には、手狭だった病院の医局から、実験実習棟の5階へ移ることができゆつたりと机を並べることのできるようになった。当医局の悩みは、医局員が少ないためにどうしても診療への比重が大きくなりがちなことであり、早く講座へ移行できるよう教授以下努力しているところである。臨床では、口腔外科の specialist の養成を目標にしており、口腔領域の悪性腫瘍、口唇口蓋裂の奇形、顎変形等の治療に力を入れている。基礎的研究では、少人数の為、教室のテーマを「骨」にしぼり、骨の石灰化、骨膜の骨形成能等に関し、形態学的、生化学的に「コウコウ」と行っている。更に、凍結乾燥骨を顎骨再建へ応用するための基礎的実験を軌道にのせるところである。

幸い、文部省科学研究費の交付を、昭和54年、56年、57年、58年とうけることができ講座研究費のない当医局としては大変貴重な研究費となっている。今年7月に、口腔外科学会と口腔科学会の北日本地方会を主催し、医局のチームワークの良さを発揮し無事終了することができた。

仕事の他に、医局ではスポーツも盛んで、どれもうまくはないが、夏はテニス、冬はスキーと研究時間をさきすぎているきらいもある。野球も3年前より教授、研究生を含めてようやく9人が確保され、月賦にてユニホームを購入しチームができた。チーム名は Bonitos (スペイン語でかわいい男の子達という意味だそうである)で、確かにチームカラーとチーム名は一致している。しかし、今年は四戦全敗で、やはり「ハイシヤ」(敗者?歯医者?)であった。医局員の趣味も、音楽、囲碁、車等多彩で、ステンドグラス作りに生きがいを見つけようとしている者もいるが、どれも奥は深くないようである。又、医局では季節や医局行事とは全く関係なく行われる「500円会」というアルコール抄読会(消毒会?)がある。これは500円の会費で肴を用意しアルコールの味見をするという高級な催しであるが、どうも近頃は諸物価値上りの為か、アルコールだけということが多くなってきた。小世帯の demerit ばかりが気になるが、少人数医局であることを口実に敬老の日、勤労感謝の日でさえ教授に当直を割り当てることができるのは数少ない merit(?) のひとつであろうか。

(歯科口腔外科 講師)

昭和58年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和58年度通学方法・居住状況調査結果をまとめたので掲載します。

(学生課)

昭和58年6月1日現在

アンケート提出率

学 年	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計
在籍学生数	130 (17)	125 (14)	130 (10)	121 (9)	115 (8)	100 (16)	721 (74)	13	13	14 (1)	21	61 (1)
アンケート提出数	107 (16)	92 (12)	78 (7)	97 (9)	86 (5)	57 (9)	517 (58)	12	11	12 (1)	11	46 (1)
提出率(%)	82.3	73.6	60.0	80.2	74.8	57.0	71.7	92.3	84.6	85.7	52.4	75.4

通学方法のまとめ

方法	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計
徒 歩	40 (7)	13 (3)	8 (3)	16 (6)	11 (1)	8 (2)	96 (22) [18.6]	5	3	1 (2)	1	10 (1) [21.7]
自 転 車	45 (3)	40 (5)	20 (3)	12	11 (1)	8 (3)	136 (19) [26.3]					
バ ス	12 (6)	10 (4)	1	2	4	1	30 (10) [5.8]					
バ イ ク	任意加入	4	2		2	2	10 (1.9)					
	非加入	4	7 (1)		4 (1)	1	26 (2) [5.0]					
自 動 車	任意加入	12	28	51 (1)	47 (2)	32 (2)	170 (5) [32.9]	7	8	11	10	36 (78.3)
	非加入			1			1 (0.2)					
自動車相乗	3	6	13	11 (1)	7 (1)	5 (2)	45 (4) [8.7]					
国 鉄	3						3 (0.6)					
計	107 (18)	92 (12)	78 (7)	97 (9)	86 (5)	57 (9)	517 (58) [100]	12	11	12 (1)	11	46 (1) [100]



居住状況のまとめ

居住状況	学 年						小 計	大 学 院					
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	小 計	
自 宅	6 (27)	3 (15)	1 (18)	2 (1)	1 (18)	1 (10)	14 (108)	2	1	2	1	6 (11.1)	
親戚又は知人宅	1	1		2 (1)			6 (1)			1		1 (2.1)	
下 宿 (光 熱 水 料 込 込 み)	~40,000		1	2			3					0	
	~45,000						0					0	
	~50,000						0					0	
	50,001~						0					0	
	~40,000	8 (2)	4 (1)	8 (1)	8 (1)	5 (1)	1 (5)	34 (34)					0
	~45,000	30 (1)	24 (1)	15 (1)	9 (1)	9 (1)	17 (2)	104 (21)					0
	~50,000	8 (1)	1	4	1	5	2	21 (2)				1	1
	50,001~	1		1				2 (2)					0
	~40,000				1			2 (2)					0
	~45,000	1 (1)	2	2	1			7 (7)					0
~50,000	1 (1)	3		2 (1)			7 (7)					0	
50,001~			1				1					0	
~40,000			2				2					0	
~45,000							0					0	
~50,000			1				1					0	
50,001~	7 (1)	1 (1)	1 (1)				9 (9)					0	
~20,000	2 (2)		1 (1)	2	1	2	7 (7)					0	
~30,000	2		5	2	2	1	12			1		1	
~40,000				1			1			1 (1)		1 (1)	
40,001~							0					0	
~20,000	1 (1)	3		1 (1)	2	2	14 (14)			1		1	
~30,000	2 (2)	5	13	6	8	8	45 (45)			4	1	6	
~40,000	4	9	2	12	4	4	35 (35)			1	1	2	
40,001~	4 (1)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	3		10 (10)			1	1	2	
~20,000	1	2	2	4	2	2	13 (13)					0	
~30,000	4 (2)	1	3	2	3	2	13 (13)			1		1	
~40,000	1	3	2	9	8	3	26 (26)			2	1	5	
40,001~			1	3	1		5				3	3	
~20,000						1	1					0	
~30,000						1	1					1	
~40,000		4	1	2	4	1	12 (12)			1	1	2	
40,001~	1			1	1		3			2	3	5	
~20,000							0					0	
~30,000							0					0	
~40,000							0					0	
40,001~							0					0	
~20,000				1	1	1	3 (3)					0	
~30,000				1			1					0	
~40,000			1 (1)		1		2 (2)					0	
40,001~							0					0	
~20,000					1	1	2				1	1	
~30,000							0					0	
~40,000							0					0	
40,001~							0					0	
~20,000							0					0	
~30,000							0					0	
~40,000							0					0	
40,001~							0					0	
18段~							0					0	
~20,000							0					0	
~30,000							0					0	
~40,000							0					0	
40,001~							0					0	
道営・市営住宅							3			3		6 (6)	

() は女子内数 [] は百分率

解剖体慰霊式

9月21日(水)午後2時00分から本学体育館において昭和58年度解剖体慰霊式が執り行われました。参会した御遺族・来賓・本学教職員300名は、本学学生の教育及び学術研究のために尊い遺体を提供され、医学発展の礎石となられた188名(病理解剖87名、法医解剖41名、系統解剖60名)の方がたの遺徳を忍び御冥福を祈念しました。

解剖体御芳名奉読、黙とう、学長・学生代表(3年平 義樹君)の追悼の辞のあと、参会者による献花が行われ、吉岡副学長の謝辞をもってしめやかなうちに今年度の慰霊式が終了しました。

(学生課)



体育大会

学生主催の体育大会が9月7日(水)、学生・教職員のべ500名の参加により行われた。クラス対抗3種目、有志対抗3種目の計6種目で、各チームとも優勝めざして善戦健闘した。結果は次のとおりです。



クラス対抗 (総合優勝 2年)	サッカー	1位 2年	2位 4年
	バスケットボール	1位 2年	2位 5年
	2,000mリレー	1位 5年	2位 1年

有志対抗	ソフトボール	1位 Sky playere(5年赤坂)
		2位 職員チーム
	バレーボール	1位 漢字博士(3年今田)
		2位 トミとエリー(5年高橋)
	卓球	1位 5年代表(5年朝倉)
		2位 ラ・サル+1(2年岩崎)

(学生課)

新入生研修(第2回目)



4月に行われた第1回目の新入生研修に引き続き10月27日(木)~11月10日(木)まで(水・土・日は除く)第2回目の新入生研修が行われた。1年生全員が8グループに別れ教授2名、学生約16名を1グループとして、本学職員研修施設で午後5時10分から約2時間にわたり、会食・懇談が行われた。

(学生課)



課外活動短信

将棋部

10/8 第31回全道学生将棋選手権大会(於札幌)
10/10 (団体戦) 準優勝
(個人戦) 準優勝 2年 山口 亮(3段)

硬式庭球部

10月 全道学生選手権大会
丹羽一善(5年) W優勝 Sベスト8

ボディビルディング部

11/20 全道学生パワーリフティング秋季大会
(於北海学園大)

総合 2位

個人 フェザー級 優勝 長坂 武(2年)

ライト級 ッ 山口聖隆(2年)

ミドル級 2位 原沢克己(2年)

ヘビー級 2位 西本邦弘(1年)

●10/23 旭川市民大会(硬式庭球)

S 優勝 田中公夫(3年)

窓外



久保良彦

伯刺西爾雜感

明けましておめでとうございます。読者諸兄姉には新たな希望を胸一杯に新年をお迎えのことでしょう。一層のご活躍を祈念いたします。

「かぐらおか」も丁度十回目のお正月を迎え、ひとつの節目を数えたことになりましたが、この間の本学の発展と充実はご存知のとおりです。小誌もいささかお役に立ちえたことと、共に慶びたいと存じます。

さて、昨年九月、機会がありブラジルはリオ・デ・ジャネイロに数日滞在いたしました。その折撮ったブラジルの子供達の屈託のない笑顔新春のプレゼントといたします。



ブラジルは人種のるつぼといわれますが、実際その多種、多様さは全く見事というほかありません。そのため人種的偏見もないようで、とくに子供達の人をつっこさ

が印象的でした。ブラジルにおける日系人の活躍はつとに知られているところですが、このように人種の偏見がないことや、ポルトガル語がその表現とか発音の点で意外に日本語に近いといったことも、その活躍のかくれた土台になっているのでしょう。折から一週毎に為替レートが変わるといふ激しいインフレで、旅行者には有利であります。反面当然のことですが物価の上昇に収入が追従できず、市民生活は相当きついに聞きました。

最近では世界中どこへいっても日本人と日本製自動車にお目にかかれるものと思っておりましたら、リオ・デ・ジャネイロではその自動車にお目にかかれず、何となく物足りない感じがいたしました。厳しい自国の自動車産業保護政策が原因でした。

ブラジルといえばコーヒーがすぐに連想されますが、さすがに安く、市価は日本の五分の程度です。一般に濃い味でその割に香りが乏しいように思いました。マーケットで割高のインスタントコーヒーがむしろ多く売られていたのに時を感じました。

ブラジルでもやはり人口の都市への集中化が起っているようで、日本の敗戦後にみられたバラックと同じような小屋が密集する巨大なスラムも目についた一つです。それが素晴らしい豪邸の塀に接して始まるといったところが何とも興味深い取り合せに思われました。聞くところによりますと、そのような状況下でもさしたるトラブルは生じていないそうで、隣は隣、我は我で楽しく過ごすことができれば満足といった割り切り方をしているということです。これがラテンアメリカ気質というのでしょうか、彼我の差を痛感させられました。

ブラジルへはジェット旅客機で実に片道二十四時間を要します。地球はまだまだ大きいと沁々実感いたしました。

(外科学第一講座 助教授)